



渡辺 大直

淡路で但馬牛の飼育を目指している人の所に行ってきた。1月に書いた、正月に先輩が牧場公園に連れて来た彼だ。

「やっと用地が確保できたので見に来てほしい」と電話があり、先輩と淡路に行くことになった。「まるで『ぼつんと一軒家』だなア」とテレビ番組を思い出すような、未舗装の曲がりくねった細い道をしばらく走って、たどり着いた。

そこは、小高い山の段々畑に造られた果樹園の跡と思しき場所だが、今はその面影すらない。雑木が林となり、少し開けたところはササやセイタカアワダチソウに覆われ、僅かに給水栓が果樹園だった

ことを偲ばせる。用地を借りるにあたっては、島から出た地権者も多く、彼はその人たちを訪ねて同意してもらったという。

彼が整地した広場に建てたプレハブ小屋が作業拠点だ。セイタカアワダチソウが生い茂る段に牛舎を建て、その下の広場の一角に堆肥舎を造る。ササで覆われた頂上付近のなだらかな丘陵部分は、ササを刈り取って、蹄耕法(牛を放して野草を食べさせ、牛が歩くことによって蹄で土を攪拌、鎮圧して草地を作る方法)で放牧地にするプランだ。

頂上に登ってみると、眼下にのどかな瀬戸内海の景色が広がっている。この景色が彼のモチベーションを高めているらしい。



整備が進む牛舎や堆肥舎の建設予定地

夜、旅館に彼の仲間たちが集まり、みんなで食事をした。メンバーの1人は旧知の獣医

さんだった。獣医さんは但馬牛を飼う畜産農家でもあり、彼はそこで牛飼いのレッスンをしている。

淡路に来て但馬牛飼育を始めたら若者もいた。若者は既に牛舎と3頭の雌牛を持ち、牛飼いをスタートしていた。若者の当面の目標は村に馴染むことだという。村の行事には全て参加し、おじいちゃん、おばあちゃんの畑を手伝ったり、時には晩ご飯をこちそうになつて話し込んだりするそうだ。若者の明るいキャラクターが村に受け入れられているように思える。

彼らが地域とのつながりを大切にしながら、但馬牛を飼って定住し、荒れた山野が息を吹き返し、地域の元気がつながってほしい。但馬牛も新しい時代の「地域の宝」に向かって一歩踏み出したかな? と思えた一晩だった。

活気につながる人脈作り

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。